

人文学部プロジェクト活動報告

人文学部は、学会・研究会会誌刊行助成として以下のプロジェクトに戦略的経費（研究プロジェクト助成）を配分しています。（右は代表者。）

山口国文	林 伸一
英語と英米文学	宮原一成
独仏文学	井上三朗
山口地域社会研究	横田尚俊
アジアの歴史と文化	阿部泰記
〈教え、学び、分かること〉の基礎的探究	ジュマリ・アラム

各プロジェクトの紹介も含めて、今年度の活動報告を掲載いたします。

山口大学人文学部国語国文学会発行の『山口国文』について

山口大学人文学部国語国文学会は、1977年5月設立以来33年の歴史があり、毎年、春季には研究発表会と総会、秋季には研究懇話会を開催している。学会誌として『山口国文』を発行している。ここ数年は、人文学部の研究経費の中の戦略経費の配分を受けている。現在『山口国文』33号を編集中であり、次のような論文が掲載される予定である。

（ ）内は著者。

『大経師昔暦』における近松の方法
(相良和菜)

〔資料紹介・翻刻〕（山口県文書館蔵）

毛利広鎮『類題玉函集 下』（小野美典）

鷲流狂言台本諸本における言語的様相を

めぐって—「あらけない」「めでた

い」の用法を中心に—（高村正人）

「謙讓語Ⅰ」と「謙讓語Ⅱ（丁重語）」

(磯部佳宏)

日本語と中国語のあいさつ表現について

—外国人研究者の特別授業より—

(曲志强・林伸一)

「鬼」のイメージと比喩表現について

—アンケート調査の分析—

(佐々木翔太郎)

「切れる」と「キレる」に関するマインド

マップ調査について（李曉娜）

日本語学習辞書開発の課題と要件について

(今井新悟)

上記8本の内、上から2本は文学関係であるが、残り6本は語学関係となっている。また、上から3本までは縦書きであるが、残り5本は横書き論文である。長らく『山口国文』は縦書き論文が主流であったが、近年横書き論文が多くなってきている。

『山口国文』には、5月の研究発表会や秋の研究懇話会で口頭発表された内容について発表者が加筆訂正を行った上で投稿し、掲載されることが多い。『山口国文』の投稿規程には、「日本語学、日本文学、日本語教育、国語教育に関する研究論文」とあるが、上記のように「日本語と中国語のあいさつ表現に

ついて」の対照研究があったり、「鬼」のイメージでも日本では男性イメージ、中国では女性イメージと異なることが示されたり、異文化研究の要素も含まれている。執筆者は、教員や卒業生、大学院生などであるが、日本語学・日本文学コースの関係者だけでなく、上記の今井新悟氏のように留学生センターの教員（特別会員）も含まれている。昨年発行の『山口国文』32号は、添田建治郎教授退職記念特集号として発行された。1978年の創刊号から2009年の32号までの歩みをたどってみると学会彙報、会員消息などを除く総頁数が3900頁で、次のような内容となっている。

教員執筆	113件
卒業生執筆	95件
大学院生執筆	69件
文学関係	165本
語学関係	123本
総論文数	288本

『山口国文』は約500名の会員に配布されるだけでなく、全国の約350の大学付属図書館等にも配布され、山口大学のホームページでYUNOCA（Yamaguchi University Navigator for Open access Collection and Archives：山口大学学術機関リポジトリ）という検索サイトで検索すると近年のものは全文が見られるようになっている。ちなみに検索数がトップなのは『山口国文』で、2009年9月時点での検索論文のベストテンの中の第一位が中国人の修士修了者の韓飛さんの論文「日本語の新語に見る日本事情—〈オタク〉関連語を中心に—」（32号掲載）で、第3位が同じく中国人の修士修了者の許恵玉さんの論文「『日本文化』と『中国文化』のイメージ比較研究—日本人のマインドマップ調査による検討—」（32号掲載）であった。

YUNOCAの検索は日本国内のみならず海外からもアクセスがある。このように研究の成果を内外に示すだけでなく、日本語学・日本文学コースの在校生（学生会員）にも『山口国文』は配布されており、論文の書き方を示すなど教育面にも大いに貢献している。

（林 伸一）

『英語と英米文学』

学内同人による紀要。年1回の発行で、1965年の創刊号以来、号を重ね、平成21年度発行予定の今号は第44号である。

本誌は、山口大学文理学部・教育学部・教養部の英語関係の教員を母体とする同人の紀要として創刊された。編集の責任表示には、「山口大学文理学部英米文学研究室」と書かれていた。現在、人文学部の英語学・英米文学コース所属の教員を中心に、山口大学の教育学部・経済学部・工学部・留学生センターに所属する英語学・英米文学・英語教育の研究者が集い、ベテラン・若手の区別なく、それぞれの研究成果を公開し批評しあう媒体として有効に機能している。ただし、同人紀要といっても排他的なものではなく、会員との共著論文であれば部外者の参加も可能で、これまでも前例がある。また、近年、英語学・英米文学・英語教育のほかにも英語関連の研究論文を受け入れるようになり、学術誌としての間口が広がってきている。

本誌は、まず研究の萌芽的な段階や基礎データの集積という段階で論考を公刊し、それを足がかりにして、将来、より深化した研究成果へつなげるという、一種の修練の場として活用されることが多い。実際、本誌に発表された研究論文が、結果的に、その後学術

誌に採用される査読論文の布石となった事例が少なくない。

だが、それは本誌に収録されている論文の完成度が低いという意味ではない。それぞれに完成された本格派の良質な論文がそろっており、他の文献に引用される論文がこれまでいくつも掲載されてきた。学問水準の面からも内外から評価されている紀要である。大学全体もしくは学部単位で発行される紀要とはひと味違う、英語関連分野に特化した学術紀要として、同分野の学外研究者からも重宝されている。

今年度発行分の第44号には、3本の研究論文が掲載される。そのうち、人文学部所属の教員としては、太田聡教授が英語学分野の研究論文「人・道具を表す英語の接尾辞について」を発表する。他に、経済学部の宮崎充保教授による “A Translation: Yamamoto Shugoro, *Tales of Red Beard*: ‘The Tale of a Madwoman’ and ‘The Direct Appeal’ ”

(文学翻訳論・翻訳実践) と、留学生センターの福屋利信教授の「ビートルズとリヴァプール」(英語圏文化研究) が掲載される予定である。特に字数制限などは設けていないため、この号の最終的なページ数は未確定である。

(宮原 一成)

『独仏文学』

山口大学『独仏文学』は、本学のドイツ語・フランス語の専任教員を会員とし、元教員を準会員とする研究雑誌である。毎年発行され、2009年度までに合計31号を数える。2009年度の第31号は、4名の論文からなる。フェリツィタス・ドーブラ、坂本貴志、小粥

良、井上三朗の各教員の論文である。それぞれの論文の内容を紹介することにしよう。

ドーブラ論文は、「逃走と潜伏による生存の希望。文書または映像による記録を含む、ナチスから迫害されたユダヤ系ドイツ人の子供たちと若者たちの回想録選(2)―潜伏、隠れ家、援助者の役割。救援者研究のための註釈」という表題である。実体験に基づく5編の回想録を用いつつ、1933年から1945年に至る時期に、ドイツのユダヤ系の子供たちや若者たちが生き抜かねばならなかった悲惨な運命に焦点を当てる。これらの若者たちは、防衛機制やユーモア精神の発動に助けられて、心の奥底には極度の不安を抱えていたにもかかわらず、この恐怖の時代を耐え抜いた。彼らは、困難な状況の中で、すばやく決断し、主体的に行動した。彼らは皆、時にはナチスと鉢合わせするような事態に陥っても、危険を顧みず、大胆に行動することによって、彼らの出自について何も悟られずに難局を切り抜けた。どの回想録にも、救援者が登場する。救援者や援助者の中にはユダヤ人もいたとはいえ、非ユダヤ人の救援者がいなければ追い詰められてしまっただろう。非ユダヤ人の救援者は、さまざまな社会層から現われた。彼らは人道的な観点から行動したのであるが、それはしばしば彼らの身近な環境に根ざしたものであった。そしてこの論文は、今日の我々に突き付けられている問いが、もしあの時代に生きていたとしたら、我々がどのように生きていこうか、同じような過ちや、罪や、傍観者的態度を繰り返さないであろうかという問いである、と締めくくっている。

坂本論文は、「新プラトン主義的―グノーシス的な人間の教育について―シラーの「自由」の概念の新たな理解のために」と題さ

れている。2009年10月に日本ヘルダー学会の主催による国際シンポジウム「ヘルダーと教育の伝統」において発表された独語論文の全文である。人間は神の似姿であり（『コリントの信徒への手紙一』）、この姿へと向けた「形成Bildung」が「教育Bildung」の原義である、とのテーゼの思想史上の系譜を遡りつつ、『ヘルメス文書』、プロティノス『エンネアデス』を参照して、「形成/教育」の神秘主義的側面を明らかにする。そしてこのテーゼを近代において引き継ぐシラーの美的教育論における神秘主義的背景を照出して、自由の概念の理解の根本的な刷新を図り、美と人間形成、美と社会形成の関係について今日における新しい可能性を提起する。

小粥論文の表題は「二つの庭——ホーフマンスタールとゲオルゲ——」である。ホーフマンスタールとゲオルゲのカフェ・グリーンシュタイドルでの邂逅は、あまりに有名なドイツ文学史上のエピソードであるが、この出会いから生まれたホーフマンスタールの三篇の詩を詳しく読解しながら、イリヤ・デュルハンマーが2006年にその研究書でこれらの詩について行ったホーフマンスタールのホモエローティックの表れという読み方を検討する。特に、ゲオルゲの『アルガーバル』に現われる「大きな黒い花」が育成される地下王国の庭についての詩行と、それと対を成すものとして作成されたとされるホーフマンスタールの『私の庭』という詩を対比しながら、デュルハンマーの読み方に異議を唱える。2005年に出版されたウルリッヒ・ヴァインツィアールの伝記的研究が提起したホモエローティックの問題は、そのような観点からの読解が有効な作品（たとえば、『ティツィアーンの死』）が確かに存在すると思われるものの、全てをそれに結びつけることには無理がある

と言わざるを得ない、としている。

井上論文は、「福永武彦とジュリアン・グリーンの小説作法・小説技法」と題されている。福永武彦がジュリアン・グリーンからいかなる影響を受けたか、を明らかにするために、小説作法・小説技法という観点から両者の文学を比較検討する。両者が内的リアリズムの作家であることを指摘し、そのあと、人称と時間の問題、文体上の技法、視点の拡散という角度から二人の作品を対比する。技法面では、グリーンは伝統的であり、福永は前衛的な作家であるといえる。けれども福永がグリーンに文学に接することで、内的リアリズムのうながしを受けるとともに、できるだけ多くの人物の立場に立って物語を作るという方法を摂取したと結論している。

以上が、2009年度の『独仏文学』第31号に発表された論文の概要である。会員（教員）の数が減少している中で、毎年、『独仏文学』を規則正しく発行することが強く望まれるところである。

（井上 三朗）

山口地域社会研究

2002年10月に、人文学部社会情報論コース（現在の社会学コース）の教員を中心に、社会学、民俗学、文化人類学などを専攻する大学の研究者と、地元行政機関、NPO、地域住民組織などの関係者とが連携して、山口地域社会学会が結成されました。このプロジェクトは、同学会の研究活動により構成されています。

山口地域社会学会では、年3回の研究例会を開催しているほか、学術雑誌『やまぐち地域社会研究』を毎年刊行しており、これらの

活動の一部を人文学部に支援していただいています。

今年度（2010年3月）刊行予定の『やまぐち地域社会研究』第7号では、学会の生みの親でもある小谷（三浦）典子教授の定年退職を記念して、特集号を組んでいます。小谷教授と縁の深い会員外の研究者にも特に寄稿を依頼し、会員・非会員合わせて20本あまりの論文を掲載しています。

研究論文のテーマ・内容は多岐にわたっており、小谷教授による「流動型社会からネットワーク型社会へ—社会学徒の40年—」という巻頭論文をはじめとして、コミュニティ、高齢化、学校、若者など日本社会の現状・問題を対象とした研究論文のほかに、台湾や中国などアジア社会の社会構造や社会問題を分析した論文も数多く掲載されています。

（横田 尚俊）

山口大学アジア歴史・文化研究会

私たちの研究誌『アジアの歴史と文化』は今日までに14号を発刊した。山口大学とその関係者（退職した教員、国外の友人など）の中国学を中心とする学術研究を国内外に伝えることを目的としている。研究会の前身は文理学部時代の山口支那学会であり、「中国の歴史と文化」2巻を刊行した。人文学部になって漢籍調査班を組織し、『明倫館漢籍・準漢籍目録』等の目録を編纂した。最近はおっぱら研究誌『アジアの歴史と文化』の刊行に努め、学部長裁量経費の支援を得て定期刊行し、学界に新説を提起している。14号は以下のとおり、音韻、哲学、文学、社会学、歴史学、芸術、比較文化の各方面からの論述を掲載した。

富平美波：方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注2）

松尾善弘：尊孔論と批孔論—日中『論語』評釈考異

孟修祥：論西曲歌“尚情”的柔性格—兼論與吳歌的差異

梁惠敏：南朝荆楚民歌—西曲歌繁榮的歴史文化背景

徐炜・朱炳祥：中国宗族在乡村政治中的表达：历史的检视与经验的观察

黄柏权：土家族摆手活动中祭祀神祇的历史考察

周丽玲：中国传统音乐漫谈

田梅・荒卷大拙：明使趙秩とその山口十境詩

阿部泰記：對比中日王昭君故事的演變

この中で、富平美波・田梅・阿部泰記氏は山口大学現職教員、松尾善弘氏は退職教員、孟修祥・梁惠敏氏は長江大学教授、黄柏権氏は三峡大学教授、徐炜・朱炳祥氏は武漢大学教授、周丽玲氏は湖南大学教授、田梅氏の共著者荒卷大拙氏は「大内文化を正しく伝える会」代表である。なお孟修祥・黄柏権氏は大学院東アジア研究科に客員研究員として赴任していただいた。

富平・松尾氏のご専門の音韻学、哲学の方面からのご論考を投稿され、孟修祥・黄柏権氏をはじめ梁惠敏・徐炜・朱炳祥・周丽玲氏ら湖北省の高等教育機関に在籍される研究者からはご出身の湖北省の文化に関わる論考を投稿していただいた。田梅・荒卷大拙氏は山口の大内氏時代に来日した明の使者趙秩の「山口十境詩」を詳説していただいた。阿部泰記は王昭君の故事の中国と日本における展開を示し、両者を対比して各国の文化の比較を行った。王昭君の故事は従来平安朝までの

紹介に止まっており、江戸の説経節や明治の尾崎紅葉の小説などは紹介されていない。この論考は武漢大学桂勝教授（大学院東アジア研究科客員研究員）の紹介により王昭君学会で発表する予定であったものをここに発表した。これからも我々は異文化交流に関する調査・研究成果を積極的に発表していきたい。

（阿部 泰記）

〈教え、学び、分かること〉の基礎的探究 （山口大学哲学研究会）

山口大学哲学研究会は、山口大学に所属する哲学、思想系の教員を中心とした組織で、会誌の発行、合評会、研究発表会などの活動を行っています。現在正会員（学内の常勤教員である会員）は10名ですが、そのうち、人文学部の教員は、ジュマリ・アラム、柏木寧子、田中均、豊澤一、藤川哲、古荘真敬、脇條靖弘の6名です。また、名誉会員（過去に山口大学に所属していたことのある学外の会員）16名のうち、元人文学部の教員は、上野修、遠藤徹、奥津聖、加藤和哉、木村武史、武宮諦、外山紀久子、林文孝、頼住光子の9名です。

○2009年度活動報告

・合評会、研究発表会

2009年9月10日（木）に山口大学人文学部に開催しました。題目は以下のとおりです。

『山口大学哲学研究』

第十六巻掲載論文合評会

「西田幾多郎『善の研究』における純粹経験について」

（発表者 来栖哲明、コメント 田中 均）

研究発表

「プラトンの『テアイテトス』の相対主義について」

（発表者 脇條 靖弘）

研究発表

「自己と時間」

（発表者 古荘 真敬）

研究発表

「ツアー・パフォーマンスとは何かー
《山口市営P》を中心に」

（発表者 田中 均）

・『山口大学哲学研究』第17巻

2010年3月発行。掲載論文は以下の4本です。

柏木寧子、『今昔物語集』天竺部における釈迦仏ならびに衆生の理解（3）

岡村康夫（教育学部）、「宗教とは何かー宗教学入門ー」

脇條靖弘、「プロタゴラスの相対主義はいかにして自己論駁のか」

中田考（同志社大学）、「イスラームの今日的使命ーカリフ制再興による大地の解放」

山口大学人文学部の予算より支給された「平成二十一年度研究経費に係る戦略的経費（研究プロジェクト助成）」は、会誌印刷、製本の費用の一部に充てました。

（脇條 靖弘）